

って、精神医学と宗教の治療や癒しの対比をみてみたい。

精神療法においては、一般にある種の心的境地を獲得すること(洞察と呼ばれることがある)が、治療的な効果をもたらすとされる。臨床の言葉で表現すれば、「今まで見えていなかったものが見えてきた」といった、ごく平易な言語表現をとる。同じことはもちろん宗教でも起こるが、獲得された心境はより練られた言葉で語られるであろう。

しかし、さらによく精神療法を考えてみると、そうした洞察を自ら獲得する体験の基礎となる対話、さらには対話の中で声を出すこと(そこには叫びや泣き声も含まれよう)に治療的な機序が大きく関連すると考えられており、精神療法では重視される。そしてこの体験は筆者的には優れてゾーエー的な性質を持つと考えるのである。

精神医学は、生のビオスの側面の発展を第一に目指す領域では原理的ではない。あくまでゾーエーとしての生を大事にすることが基本姿勢である。一方人間は自らの価値・目的を持つて生きることに、すなわちビオス的に生きることをまた目的とする。この二つの生を前提にし、治療と癒しという共通の場から宗教と精神医学を考えていくことが、今後の「視点」の一つになりうると思う。

プラグマティズムとしての専修念仏

菱 木 政 晴

一 高木顕明の『余が社会主義』

大逆事件に連座させられて獄死した高木顕明が『余が社会主義』という一文を残している。本発表は、この『余が社会主義』のテキスト解釈にプラグマティズム思想を活用しようという試みの一端を紹介しようというものである。

二 プラグマティズム

プラグマティズムは、宗教的な問題について、たとえば、神の存在の有無というような問題について、それを観念論的に論ずるのではなく、科学的実証主義によって論ずるのではない。生活のうえでの有用性、思想の道具としての有用性から論ずる。

三 プラグマティズムとしての専修念仏

第一のレベルとして、浄土教は仏教のプラグマティックな展開だと考えられる。『余が社会主義』には、「余は極楽を社会主義の実践場裡であると考へて居る」とあるが、仏教を苦悩の解決法として考えた場合、浄土教は、個人の内面に平和と平等を達成するのではなく、平和と平等の功德に満ちた阿弥陀如来の願の酬報として立てられた極楽世界へ往けば、そのような功德が備わると考える。これは、効果を重視するプラグマティックな態度である。ただし、このレベルにおいて、現実社会の平和と平等にただちに有効な方法は見出されない。

第二のレベルとして、方便法身としての阿弥陀如来という考え方が、プラグマティックである。顕明は、「尺(釈)尊等の入師の教示に依て理想世界を欲望し、救世主たる弥陀の呼び聲を聞くと言うが、釈迦もまた、超人として神格化された仏陀ではなく、他の入師と同列の同志扱いなのである。一方、方便法身とは、私たちの間に確かにあるとしか言いようのない平和と平等への希望を説明するために、説明の手立て(方便)として立てられたものにすぎない。私たちは、この方便法身に対してだけ信徒の態度を取ることによって、教祖を含む具体的な他人を主として追従することや、何にも希望を持たないような二ヒリズムからまぬがれることができるのである。方便法身、報身という概念を徹底すれば、歴史上の釈迦は、まさに釈迦その人の時代にそうであった、「以前にも多数出現してきた、またこれからも出現すべき無数の仏陀(目覚めた人)の一人」という本来の位置にもどり、釈迦もまた超越的存在ではなく、私たちを励ます先輩にすぎなくなる。ただし、このレベルにおいても、方便法身という「真理」が他の現実的な真理との関係で十分に有効とまでは言えない。

第三のレベルとして、往還二廻向の考え方が、プラグマティズムである。仏教の目標は、自ら苦悩の解決者となって他の人びとの苦悩の解決を助ける者になることである。前者を「自利」、後者を「利他」という。浄土教においては、自利は自らの往生浄土、利他は還来穢国して利他教化することであり、それぞれ往相と還相とも言う。浄土へ往くということが現実にならぬという意味であるかということと、その平和と平等をどのよう

他者に伝えるのが明らかでなければ、プラグマティックに有効な真理とはいえない。それを明らかにするのが往相還相の双方が同時に阿弥陀如来から廻向されると言う考えである。行者が実際に行うことは、「南無阿弥陀仏を唱える」ということにすぎないが、それが本人の意思にかかわらず、自利と利他、往相と還相を実現してしまうのである。このレベルにおいて、ついに、専修念仏は現実の社会において有効な真理となる。

顕明は、「斯の如くして念佛に意義のあらん限り心零上より進で社会制度を根本的に一変するのが余が確信したる社会主義である」と言う。

妙好人浅原才市における「入信」に至る

心的過程に関する一考察

中尾 将 大

浄土真宗における在家の篤信者のことを妙好人(みょうこうにん)とよぶ。これまで日本各地に多くの妙好人が出現している。それぞれの妙好人は個性を持っていたが、「真宗のご法義をありがたがり、仏智との出会いを果たし、この世の価値観を超越して真に幸福な人生を歩んだ」という点においては共通している。本発表ではその一人、浅原才市(一八五〇—一九三二)を取り上げる。浅原才市について、藤能成は「島根県瀬摩郡温泉津町に暮らした下駄職人であり、寺院での熱心な聴聞、日々の念仏の生活を送った。下駄作りの仕事をしながら胸の奥